

【小説部門・優秀賞】

金剛と石炭

北海道小樽潮陵高等学校 第1学年 村上 優歌

ああ、あの日のことならはっきり覚えています。あの雪が降った夜のことでしょう。僕は何だか眠る気分になれなくて、せつかく珍しい天気だし、と外を散歩していたんですよ。後で聞いたんですが、あの日ってあのご主人の義妹さんがお亡くなりになった日だったのですね。え、その取材ですか。そんなこと記事にしてどうすんですか。でもまあいいですよ、まだ原稿の締切には余裕がありますから。じゃあそこの喫茶店にでも入りましょう、ここじゃあ寒いですよ。

ええと、何でしたっけ。ああそうそう、あの義妹さんの話でしたね。あの家の周りは薄く嫌な臭いがしたので、近所の方は嫌っていました。その臭いも彼女が帰郷して来てからのことだったので、彼女は気が触れた人間なのだとみんな口を揃えていたんです。でも僕は、ご本人を見たことはありませんでした。彼女はここ数年、外に出てすらいらないはずですよ。きっと家から出たくなかったんでしょうね。もしかすると家から出してもらえなかった、の方が正しいかもしれないですけど。あそこのご主人怖いですから。あっ、これご本人には言わないで下さいよ。ご近所付き合いが悪くなるのはごめんですから。

まあ、いつもは静かな家なんですけど、あの日は微かに消えそうな声でしたので、好奇心が湧いたんです。もちろん、肝が縮み上がるくらい怖かったですよ。草木も眠る丑三つ時、得体の知れない声がこう、ぼそぼそ聞こえるんですよ。でも怖いもの見たさって言葉もあるでしょ、まさにそれに尽きますね。それにあの盗み聞きのスリルもたまりませんし。僕は生垣の前に突っ立って、誰の声か、何を言っているのか、そっと耳をすませて聞いていました。もしこのときご近所に見つかっていれば、僕は今ごろ人の家を覗く不審者野郎、なんて言われていたでしょうね。

ああすいません、話を戻します。その音は呻きか何かのようで、言葉は曖昧でした。今思えば、それは彼女の死に際の遺言だったんでしょう。蔵とかにいたんですかね、こう、声はかなり反響して、焦点がずれたみたいに音の輪郭が揺れていました。初めは僕、何て言っているのか分からないどころか、その僅かな音を追うことすら大変で必死でした。

嗚呼、また貴方様にお逢いできるなんて、まるで夢のようです。あのときから何年経ったでしょう、今までお体の方はいかがでしたか。私のことを、少しでも覚えていらっしゃるのでしょうか。私の声はお聞き苦しいかもしれませんがどうかご理解ください、私はもう自分の体すら、思うように動かすことができないのですから。

この暗い座敷牢の中で、私の体には刻一刻と終わりが近づいてきております。床は見て

の通りどろどろと腐って濁り、細かい粉のような虫が震えるような音を立ててそこかしこに舞っています。義兄が私を外に出して下さらないから、私はここに帰ってきてからずっと、牢の片隅でぼんやり過ごしていたのです。何やらよく分からない残飯を口にし、体を猫のように小さく丸めて座っていたのです。ですが先刻から、ぐったりと寝ころんで力を抜いても、全身がぼんやりと締めつけられるように痺れてきました。貴方様の前にあって起き上がることもできない無礼を、どうかお許し下さい。

私の命は、おそらくあと少しで潰えるでしょう。脳が軟らかくゆるりと融けて、肉も削げてなくなり、汚物にまみれて、路地裏にうち捨てられたぼろきれのようになって死にます。そうしたらこの座敷にもようやく、薄らんで青白くなった月の光が差すでしょう。その光はこの部屋の中で一等綺麗な貴方様の本を、つやつやと照り輝かせるはずです。もう手垢やら何やらでインキのように真っ黒くなって、目を凝らさなければ部屋の影に溶け込んでしまう表紙も、きっとあのまるい大きな月の中では艶やかに煌めくでしょう。あのねとりとした涙のような光が貴方様の頬に流れれば、貴方様の脳裏も私の影が覆い尽くしてくれるのでしょうか。そんなくだらない妄想だけが、私をこの世に繋ぎ止める唯一の救いでした。

貴方様は優しい徳のあるお方に見えてそれだけではない、人を人とも思わないような残酷なところがあることを、私はよく存じておりますよ。その意地が悪くて歪んだ貴方様の性格を、私は全て知った上で愛していたのですから。ですからきっと、貴方様が私を思い出すことすら、今までもこれからもないでしょう。だからこそ今、私は貴方様にこのお話をすることにしたのです。本音を言えばもう一言だって声を出すたび体が軋むのですけれども、この拙い夜話が貴方様のお耳に届き、ほんのひと時だけでも私の姿をその瞳に写して下さることだけが、今の私の望みですから。

貴方様と出会ったときのことを、私はよく覚えております。私が上京したばかりの頃、随分と良くして下さいましたよね。同じ文学者としての親心のようなものだったとは分かっていますが、私は夫と別れたばかりで頼れる身内もおらず、右も左も分からなくなるような不安に心も折れそうでした。そんなときに現れた貴方様は、私にとって神様か仏様のように輝いて見えました。ああこれはまあ、口に出してみればなんとも陳腐で安っぽい響きですね。

あの頃の貴方様も、奥様と別れたばかりでさぞ不安定だったことでしょう。私、貴方様は規範を重んじるようなお方だとばかり思っておりましたから、あのお方と姦通罪で牢に入ったことがあると聞いたときは内心卒倒しそうになったのですよ。貴方様はなんて情熱的な恋をするお方なのだろうと。それに私はそれを聞いたときから、彼女が羨ましくて仕方がなくなったのです。貴方様に重く冷たい揃いの枷をはめることのできた、彼女のこと

が。

まあ、私がどれほど貴方様を愛していたのかはご存知でしょうから、言うまでもございませんね。貴方様だってあのときは互いのことを愛し、互いの才能に尊敬の念を抱いてい

たことは疑いようがないでしょう。あなたの書く作品は今も昔も掛け値なしに素晴らしい、正真正銘の芸術です。あのきらびやかで輝かしい宝石のような詩、あの暖かく優しい母親のような童謡、あの澄み切った朝のように爽やかな大和歌……残酷な何も知らない子供のようなものも、それゆえか透き通るようで、そう感じさせる貴方様の技量にはただただ畏敬の念を抱くばかりでございました。文字そのものが装飾品のように煌めきをまとった、そんな貴方様の才能に嫉妬したこともあったくらいです。

それにしてもあの頃は、本当にお金がなく酷い貧乏をして、ひもじい生活を二人で分かち合って来ましたよね。家財道具を売り、着物を売り、生活ごと切り売りするような生活が続きました。それでも私たちには揺るがない愛があったからこそ、絶望せずに進んでゆけたのではないかと思っていますのですよ。ううん、これも何だか飽和した言い回しで溜息が出そうです。言葉のひとつひとつが濁って、心の表面をたださらりと掠ってゆくようですね。恐ろしいほど心に残るものがない、言葉の薄い駄文でしかありません。やはり言葉の扱いは貴方様が一段も二段も上ですわ。どなたかが貴方様のことを言葉の魔術師だと仰っておりましたけれど、その呼称はやはり、とてもよくお似合いですね。

でも、その後にお金を一生懸命貯めて、立派な洋館を建てることができましたよね。あのときは私も本当に嬉しくて、ついにこの生活から抜け出せると思って、心が躍ったものでした。

では私がどうして貴方様のもとから去ったのかご存知でしょうか。……あ、いえ止めておきましょう、そんなことを今さら口に出すのは野暮というものでございましょう。あの祝宴の席で私と貴方様の弟君が何を話していたのかなど、とうにご察しがついているでしょうし。やはりあの宴は贅沢すぎました。それにしたって、私ばかりあのように責められては嫌にもなりますわ。……あら、私ったら余計なことを、口が滑りました。まあ何にせよ、私が去り他の殿方に匿ってもらったことによって、貴方様のお心が私に対して疑念を抱いたことは事実ですよ。

私が貴方様と別れた後、何人もの方とお付き合いをしたことはご存知でしたか。それもひとえに、私が派手なことをすれば、貴方様がまた私のことを気にかけてくれるのではないかと思ったからです。

私の最初の夫は弁護士でしたけれども、酷く女癖や酒癖の悪いひとでしたから、もうそのようなことは懲り懲りだったのです。貴方様もそのようなところはありましたがね。いえいえ貴方様に怒っている訳ではありませんよ。でもそのようなことには疲れてしまったので、うんざりして嫌になってしまっただけでございます。

私は新聞記者の男と出会って駆け落ちし、貴方様のもとを去りました。でもそのひとはすぐ、伯林へ行くのだと言って私の前から消えてしまいました。そこから他の作家様を訪ねたりしても上手くいかずに地元へ戻ったのですけれども、実家は既に没落しておりました。働こうと努力はしたのですが、それから仕事が長続きしたことはついぞありませんでした。

三人目の夫はお寺の住職でした。でもやはり駄目なものです、私たちはすぐに別れました。私の中にまだ貴方様の光があることを、彼も薄々勘づいていたようでした。でも私はどうしても、申し訳ないとは思えませんでした。だってそもそも、私が貴方様以外の殿方と恋仲になったのは全て貴方様の気を惹くためでしたからね。その相手に憐憫など、感じている余裕はありませんわ。彼との結婚生活が一年も続かなかったのは、そういう訳なのでしょう。

その次の夫は元からの知人で、またも住職でした。ですが彼の宗派では妻帯が認められていなかったもので、私は存在ごと隠されるように外に出ることができなくなりました。やはり太陽のない生活は、洞窟の中にいるようで辛いものです。いつも戸や窓を閉めているので昼か夜かも分からず、ただ歌を詠むことしか救いのない苦痛な日々が続くうちに、私は心が押しつぶされるのではというほどに精神が摩耗してゆきました。いくら窓を閉め切っても隙間から誰かに見られているような気がして不快で、それでもどうしても誰かに私のことを気づいて欲しかったのです。居てはいけないもののように扱われることがこの上なく苦しかったのです。

服の糸一本一本の中に小さな蛆虫が潜んでごそごそ動いているような気がして、どんなに寒かろうと布が触れなくなりました。仏様に助けを求めようとして外に飛び出し、服も着ないまま木の下で坐禅を組んだこともありました。この後くらいには、心が疲れきって一日中なにもできない日が続きました。そこまでして会えるお方が貴方様でないのが辛くて、なぜこんな生活を続けているのかと叫び続けた日もありました。喉が裂け、血が流れるまで嘆いても、誰も助けてはくれませんでした。

夫はそんな私を病院へ連れてゆきました。お医者様は心の病気か何かと診断なさったようで、私を一ヶ月ほど入院させました。あのときは辛かったですよ、だって私は絶対にそれが妄想などではなく、私を怨んでいる誰か、例えば前の夫などが仕掛けた罠だと心の底から信じておりましたから。そうしてその計画に協力する——少なくともあのときはそう信じておりました——夫への不信感も増してゆきました。

退院後は結局彼にも別れを告げられ、私は中風を患って実家に帰りました。私は貴方様にもう一度だけでも逢いたくて、狂ったように家の周りを探し回りました。その姿はちょうど、痴呆を患って辺りを徘徊する老人と似ていたことでしょう。私の義兄は近所の目を気にして、私をこのような座敷牢に入れたのです。あの日から私はこの暗い部屋から一歩も外に出ず、体は骨と皮だけになり、床に散らばった汚物に囲まれ、半身の動かない体を引きずって生きてきたのですよ。

あの頃は恋多き女性とも悪妻とも言われましたけれども、心が震えるような本当の恋をしたのは貴方様が最初で最後です。その後の生活は、恋だの愛だのそんな言葉で表せるようなものではございませんでしたから。そこにあったのはただ、貴方様への執着のみです。その点でいったら私は類を見ないほどの悪妻なのでしょうね。

ところで貴方様、もう少し私に何か言うことはないのですか。私がこんなにも真剣にお

話ししているというのに、口ひとつきいて下さらずに黙ってらっしゃるなんて、ほらもっとよく顔をお見せ下さい……。

——あら、貴方様の瞳はそんなに濁った色でしたか。いえそんなにぼやりとした灰色ではなかったでしょう、もっと黒々と潤って艶を持っていたはずです。もしや目が見えなくなられたのですか、おいたわしや。ならばこの部屋も私のぼろぼろな顔も、ご覧になることができないのですね。それにお肌も酷いご様子をしてらっしゃいますね。黝くて、吹き出物が散っていて、まるで土の底でおし黙る死人か何かのようで……

もしかすると貴方様はもう、この世にはいらっしゃらないのですか。ええきつとそうに違いありませんわ、だって私はずっと前この耳で確かに、貴方様がお亡くなりになられたと馬鹿にしたように言う義兄の声を聞きましたもの。そうでしょう、貴方様はもうここにはいない。ああ有り得ないアリエナイ、どうして今の今まで気が付かなかったのでしょうか、こんな簡単なこと。

あら、貴方様いったいどこへ行ってしまわれたのですか。今まで私のすぐ目の前にいらしたではありませんか。まだ私の話も終わらないうちに消えてしまうなんて。もしや貴方様は最初から全て私の幻想、私の一人芝居だったのですか。貴方様が私を迎えに来て下さった、などと思いがったのがいけなかったのですか。最期に少くらい自惚れたって、仏様もお許し下さるでしょうに。嗚呼、もう貴方様のほかに会いたい方などひとりだっておりにませんのに、これ以上何を話すことができるのでしょうか。寂しい、淋しい、ひとりにはもう慣れたつもりだったのに。

脳が直接触られているような不快感が、波が引くようにずっと消えました。目が霞んで、膨らんだ月の輪郭がさらにぼやけてきました。耳がぐわんと揺さぶられて、音が一気に遠のきました。今はびいんと甲高い耳鳴りがして、元から微かにしか聞こえなかった外の音が一切聞こえません。命の灯火が薄く細く煙を立てて、頼りなく痙攣しながらふらふら揺れているのが見えるようです。もう全てが終わります。

欲を言うなら、貴方様の人生に私の死に様を深く、ふかく見せつけるように刻み込みたかったというのが本音でございます。生きていくその一分一秒ごとに私を思い返し、貴方様の頭を私だけで満たし、その度私の死を浮かべるような、そんな苦渋の染み付いた人生を貴方様に味わって欲しかったのに、それだけが無念です。

彼女は結構長い間、話していたみたいでした。あんなにも死にそうな声をしていたのに。いや死にそうだからこそ、ですかね。誰だって未練を遺しては死にたくないですから。そういえばああいう音の響くところは、叫び声より囁きのほうが通るものなんですね。大きな声は大きく振れて、すぐ散ってしまいますから。彼女の声は枯れていたけど、僕は途中から耳が慣れて言葉の抑揚は何とか聞き取れました。そのとき僕は、彼女は誰かに語りかけているんだと信じて疑いませんでした。ただ、後で冷静になって考えてみると変なんですよね。

それというのも、返事が何ひとつ聞こえなかったんです。彼女の声は誰かと話しているようなのに、他の声は一度だって聞こえませんでした。響いていたのはずっと、あの乾いてひび割れた声だけです。それに、彼女の声が途切れた後、そっちから出てくる人の気配はありませんでした。まあ、彼女が息絶えてからずっとご遺体と一緒にいた可能性もありますけど、それにしたって不自然でしょう。

それもひっくるめて考えればあれは全部独り言で、やっぱり彼女、気が狂っていたんでしょうかね。死ぬ前って皆あのような不気味な様子になるんですかね、本当に人間の死っていうのは変なものですね。

ところで貴方、彼女のこと調べていてどう思いましたか。いえ別に変な意味とかではなく、僕も小説家の端くれでして、できるだけ広い意見を求めている次第です。僕次に彼女の話書きたいんで、ご協力いただけないでしょうか。……ああ、やはり彼女にはあまり良い印象はないのですね。あの奔放な男性遍歴ですか、やっぱりね。貴方真面目そうでもんね、そういうのは許せない性分ですか。ん、彼女が汚らわしいだって、なかなか強気なご意見ですね。でも本当にそうですか。僕は彼女のこと、まっすぐで綺麗だと思えますけどね。あの詩人様と別れてからずっと彼のことが想っていたんでしょ。素敵じゃないですか、真実の愛って感じで。んん、そんな頑なに否定することないじゃないですか。そんなに嫌ですか、彼女のこと。

貴方、エログロナンセンスみたいな読まないんでしょう。最近の流行りに乗った、露骨な表現した作品とか嫌いでしょう。あの地下世界のようなひっそりと湿った空気を一人覗き見る、何にも代えがたい快感……全くこの上ないものなんですよ、貴方も一度読んでみればいいのに。好き嫌いは個人の範疇ですし何も言うことはないですけど、そんな風に目の敵にして侮蔑や憎悪を向けるようでは、人間の深層には決して届き得ません。貴方のその潔癖な趣味を否定はしませんけど、そのお高くとまった視点だけから世の中を見ていたようじゃあいい記事など書けませんよ、今に分かるさ……ね、貴方今この瞬間、下卑た屑野郎、と僕を見下してはいませんか。ははっ、凶星ですか、貴方もそんな面白い顔できるんですね。いいですよ、今日最大の収穫です。まあそれあながち間違っていないんで、そんなばつの悪そうな顔しなくてもいいんですよ。

この広い世の中には金剛石みたいに無垢な人もいれば、石炭みたいに煤と馴染む人だっています。でも石炭が煤けてるからって捨てないでしょ、だってそれは生活を支える大事な燃料なのですから。火の中のその黒い光が、素直な鮮やかさを持つのですから。石炭にだって、金剛石には決してない美しさがあるんです。それにその美しさとかいう価値は、僕らのさじ加減ひとつで反対になったりもするんですよ。美醜は表裏一体とも言いますか。届かぬ恋に身を焦がした彼女も、それを売り物にする礼儀を欠いた僕も、見方によっては綺麗だし、それはそのまま汚らわしさでもあるんですよ。だから、あらゆる物の美しさや醜さが絡まりあって、この世は成り立ってるんです。このこと気づけたら、世界はずっと色濃く見えますよ。

ああ、もうこんな時間だ。関係ない話を長々と失礼しました、お仕事頑張って下さいね。  
お茶代は僕が払っときますから。それでは。